

36 高岡長崎家の子弟教育について

— 四代蓬洲、五代浩齋を中心に —

正橋剛 二

1. 長崎家の蘭方志向の形成と改姓

同家初代萩原孫兵衛は長崎へ遊学、オランダ流外科を修得した。元禄の頃高岡へ来て開業したが、蘭方外科として評判になり、世人は本名を呼ばず、長崎医者と呼びならわし、それが通り名となった。その時、同家では改姓をして長崎を名乗るという対応を示した。

これはまた逆に、子孫に対し、蘭方外科への知識欲を呼ぶ結果となり、以後は北陸の地にあっても機会を捕えて蘭方医学を志向する伝統が形成されていったのである。

2. 蓬洲の実父と蓬洲の修業時代

(1) 実父吉川唯右衛門敬明の人物

長崎家三代目玄貞に男子がなく、富山藩士吉川敬明(町

奉行、八〇石)の二男吉五郎を迎えて嗣子としたが、僅か四年後蓬洲一五歳のとき玄貞は没した。敬明は武士であったが甚だ学究的な人物で、天明八年には『救民要薬』(内題、のち浩齋は『寥山翁方集』と題箋を付けた。これは昨年の学会で演者が紹介した)を自から編集して蓬洲に贈っているが、この書は「越中天明類聚方」と呼ぶにふさわしいものと演者は考えている。

(2) 蓬洲の師金子李安山と京都遊学

長崎家へ来た蓬洲はその翌年から高岡の累代の名門医家金子氏について手ほどきを受け、大成論、十四経などを習った。天明四年二〇歳の四月より十月、京都に遊学、榎林由仙について外科を学ぶ傍ら、山田清次郎、皆川、那波氏について儒学も修めた。僅か半年の滞在だったので榎林氏の奥儀書に接することは許されなかったが、帰国に先立ち、御室法親王に謁して法橋に叙せられている。この経緯についてはすでに医譚誌上で報告したところであるが、敬明の意向と後楯が働いたことは確かであろう。晩年口癖に臥した蓬洲は浩齋に求められ『橋樞問答』を書き残したが、浩齋の書き加えた「蓬洲先生行状」の一

文には「(前略)淹留中不酔花柳、不迷酒肉、以親族所給学資書籍是購(後略)」となっている。

3. 浩斎の修業時代

(1) 高峰幸庵の来高と浩斎の師事

文化一〇年、蓬洲四九歳の時、高峰幸庵は越後高田より来て高岡に止まるが、これには蓬洲の力が大きかった。幸庵は京都で吉益・賀川両師に、江戸へ移って杉田・桂川・大槻氏ら蘭方医に学び、とくに西洋流眼科に優れていた。浩斎(二五歳)は父のすゝめで眼科を学ぶが、これは体格、健康に余り恵まれなかった浩斎には眼科がふさわしいと考えた蓬洲の配慮によるものであった。

(2) 江戸芝蘭堂遊学

文化一四年、一九歳の浩斎は江戸に出て大槻玄沢に約四か月師事したが、これは幸庵の手引きによっている。短い期間であったが、この師弟関係は後に玄沢の没するまで続いた。

(3) 蓬洲の「医童訓」

前記『橋樞問答』中に左のような約四丁の文がある。

蓬洲が書き浩斎が註を加えているのだが、医家の童児の

医童訓

越中高岡長崎寿菜福著

不肖男健確然夾註

初学手ほどきから、外科の学び方を示し、さらに「易を学ばざれば以って大医というべからず」とし、素読が濟んだら詩作も学ぶように、また復文も大切としている。

「オランダ流はわが家の主張する所ではあるが、他流を蔑視してはならない」といましめている点も注目される。

4. 浩斎の『餞甥雜記』

浩斎の妹とらは佐渡家に嫁ぎ、長男三良(養順)二男良益(坪井信良)三男九鬼秀達、四男建部賢隆、五男阿波加脩造など男子五人を挙げすべて医師となったが、天保九年三良が一九歳になり京都小石究理堂に向け旅立つに際し、浩斎は紙面六丁にわたり、自分の体験を赤裸々に述べ、数々の助言や、いくつかの依頼を書き贈っている。口演にあたっては、時間の関係で右のうち「医童訓」と『餞甥雜記』を中心に述べることになる。

(呉羽神経サナトリウム)